

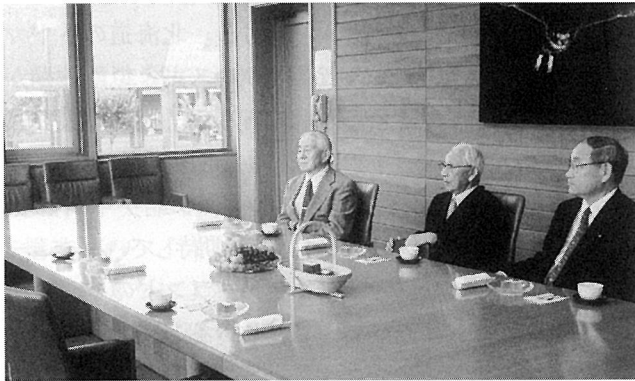
林産試験場の

思い出を語る

座談会

語る人

- 上畑 正和さん
- 旭川支社長
- 北海道林材新聞社
- 伊藤 勝彦
- 専務理事
- 北海道林産技術普及協会
- (司会)
- 大久保 勲さん
- 現場長
- 信太 寿さん
- 第八代場長
- 黒田 一朗さん
- 第四代場長



司会：林産試験場が50年の意義ある節目を機に、代表の三方にご参加頂き、座談会『林産試験場の思い出を語る』を企画したわけですが、歴代場長さんの中から草創期の所長・場長として体制の確立に尽力された北海道東海大学名誉教授の黒田さん（旭川市在住）、試験場史に特筆される移転整備時に場長であった信太さん（遠軽町在住）に現・大久保場長さんも加わって頂いての座談会ということで初期—中間—現在のバランスで「場長さん大いに語る」の機会となった次第です。ご参加を感謝致します。

黒田さんは林業指導所時代の次長でおいでになって、後に所長、名称が試験場になって場長になられ、17年の長きわたってご尽力されたわけですが、当時は内外の環境や状況が今とは随分違った中でありましたから、思い出としおかつ存じますが…。

小林庸秀さんが指導所の基礎作る

黒田：私は昭和30年の赴任ですが、小林庸秀さん（後の林務部長）が指導所の基礎を作られたんです。兵役に服さずに軍需省の出先機関の軍に使う木材調達の仕事をやられた当時彼が言うには、熟練した人達は召集受けたかして、素人に近いような人が相手では話にならない。こんな連中は忙しすぎる軍需に間にあわないと。小林さんはこれからの北海道の産業開発のために道自信が技術者を養成する機関を持つべきだと、当時の田中敏文知事に要請したんです。

この時代、国の林政は統一されてなく、本州の国有林は直接農林省が、北海道は内務省所管で国有林をやっていた。GHQ指令で中央に集めると。北海道の帝室林野局試験場の林産物研究部門、それに道庁の野幌にあった部門を中央に集めちゃったわけだ。定員の関係もあったかもしれないが、道に残る部分と目黒の試験場に引っぱり分かれたのに分かれた。目黒の弱い部分の補強を考えながら人をセレクトしたんだろうと思うが、北海道には林産部門が何も残らなくなる。狭い日本でGHQは何をしているかといふと、当時、北海道は戦時中に必要な優良木材をかなり切っていてそれなりの森林の質的低下がある、低質木材を利用することを考えないということを書え田中さんも小林さんの意見に賛成したそう。

こうして機関を作ろうと始まり、札幌駅裏に設けるのが第一案だったんですが、民生党の松浦周太郎氏や旭川市長の前野与三吉氏らが、ぜひ木材都市旭川にと政治的にも動いた経緯がありました。一次加工の製材、鋸目立て、乾燥といったことは、譲渡前の日本木材工業でやっていたから林業指導所でも直に利用できたといふことです。

小林さんが初期の所長として腐心したことは、指導する力を持たないと林業指導所などという名前などつけられない、だから研究員の質を高いものにしないと駄目だと。木材の利用加工は「匠学」だと。だから木を知るだけでなく、物理的・科学的にたけた力量が必要なんだ、単に大学林学科を出たでは直には使えないということ、作る指導所の性格を関係ある大学に行って話し、適任者を回してくれと。こうして理学系統、工学系統、商学系統からも広く研究員を集めたんですね。

信太：29年に私を含め4人入所したんですが、経営には必要な小樽商大とか工芸化学出の人もいました。即戦力のある知識の人が優先だったようです。

小林さんは「中間工業試験」



黒田一郎氏（第4代場長）

黒田：5年間に小林さんはこのような体制を造り、彼が使った言葉は「中間工業試験」。普通の研究は「基礎研究」、それから「応用研究」、それを実際化する「実地研究」、その次が経営まで入れた「企業研究」と段階を持つての順序になるわけですよ。中間試験をやるには実際の経営の仕組みが分からないといけないと、研究室といえども、そこを離れて外に出た時は工場の形でモノが流れているような形にしないと行かないというわけだ。ところが道の方はそうは問屋が降ろさない。田中道政の時は、それほど財政が無い中で、投資ばかりさせられてはということで特定財源をどうしても作らない。お前の所で何かモノを作れないかと。それはお手のものではないが、試験をするのだからモノは売りますよと。商売人にならないといけないとなる。

一方では、行政機関がそんなことをやるのは、民業圧迫だと某道議らの反対があれば、また留萌出身道議の四十栄助三郎氏らはバックアップしようではないか、モノを作るのはいいこと、長い目で見てやろうではないかと。製材で出る廃材の利用、低質材利用が目的でやれば企業と競合するようなものではないと言って、パーティクル、繊維板、ハニカムコア（ロールコア）など民間でやっていないモノの研究開発をするんだということであったんですよ。

随分行事が多い所だった…

信太：私が入った頃は随分行事が多い所だということを感じたんですね。入った翌年に設立5周年記念、近文の庁舎落成の時は記念式典に発表会。時の黒田次長ができたての指導所を業界など広く啓蒙するために、企画されたんだろうと思うんですが。若手は案内役目果たせざるんですね。風倒木処理の最中で、業界が大きく変化する時期でしたが、その後技術問題が強まったんです。

司会：大久保場長さんはこうした動きから後の39年に入られたといふことですが…

一貫して変わらないのが「業界のため」の理念

大久保：その当時はまだ黒田先生のご苦勞された草創期の気風が残っているなどという感じでした一貫して変わらないのが「業界のための試験場」の理念です。これは各場長はじめ先輩に叩き込まれてきた基本です。研究テーマとか方法は時代時代で変わりますが、試験研究が民間にいかにか役に立つか、これが使命なんですね。今もこの理念は、若い職員にも伝えるようにしています。

司会：ちょうど大久保場長さんが入られた頃は業界では製材の共販問題が取り上げられた時代で、針葉樹組合、広葉樹組合、吋組合が相次いで設立の時期で賑やかでしたが、39年は「指導所」も「試験場」に名称が変わった時に当たります。試験場での動きはどのようなものでしたか。

吋製材挽立競技大会なども

黒田：当時丸太を用意して、吋製材挽立競技大会などやりましたね。丸太を与えて等級調べ、挽材の時間と鋸の耐久力、木取りの仕方を中心に競う大会です。

信太：近文の庁舎ができた32年で、一応の基礎ができてその後45年の20周年くらいまでの間、研究の質を上げるための耐火試験室とかいろんな施設を毎年のように作っていましたし、最後が実物大の開発試験室でしたか。

司会：風倒木後に鋸の問題がクローズアップして、当時の指導所に「目立て教習所」が開設されたことが、製材技術を大きく変えることに繋がりましたし、今日の進んだ木材乾燥技術も、試験場の研究と普及が基本になっているわけで、大変な成果だと考えますね。

黒田：理屈を言う前に実際にやらないと駄目だということで、北沢伸夫君（元指導部長）がその方の長をやっていたが、日本では行政機関が目立て教習所を設けて初めてやったのは静岡、ここに何回か彼を研修にやって、磨きを一層かけて貰ってうちの試験場の担当に力を発揮してくれました。静岡は元から製材機械に関するいろん

な機械の多い所でした。目立って教習所の卒業生は、今もって親交を持っていてるようです。

場長時代に乾燥材普及協が



信太寿氏(第8代場長)

信太：私が場長の時に北海道乾燥材普及協議会が設立されて、道議だった木下一見さんが初代会長に、二代目会長相田嗣郎さん(相田木材社長)、そして今の会長吉澤春峰さん(ヨシザワ社長)と継がれていますが、業界の皆さんは一生懸命勉強されて来まして。特に旭川の新柴設備さん(柴豊社長)ら乾燥機メーカー関係の方々も試験場によく来られて、本当に熱心ですよ。

乾燥は日常のものとして…

黒田：過去から針葉樹あたりは乾燥をあまり意識してこなかったが、針葉樹であれ広葉樹であれ平衡含水率に達するものを使う習慣は、特に時代背景からして大事だし、業界の方々も意識を変えていっているように、燃える・狂う・腐るの欠点をどのように材料としての弱味を抑えることができるかという問題と共に、乾燥は日常のものとして前進させる余地はあるでしょう。アメリカ、ヨーロッパより日本はまだまだ努力をかけている。やるべき面は残された分野だと思えますね。

司会：信太さんが専門でやられた特用林産のキノコはどうか。

椎茸は種菌の販売も…

信太：椎茸の「林指一号菌」は、私が入る一年前にできたモノですが、特用林産は技術指導だけでなく、種菌も作って販売していた。最盛期だった30年代は、ホダ木で50万本分の種菌を作って、北海道の20%はこれを納めていたんですが、段々民間の種菌業界が出てきましたから、林産試験場の種菌はお役目を果たしたということですかね。各地に現在、営業で展開しているキノコ事業に、品質としては試験場のモノが繋がっているのは事実です。

合板研究の成果も特筆すべき…

司会：北海道の合板工業は歴史的なものがありますが、試験場にとって合板研究の成果も特筆しなければならぬと思います。

大久保：そうですね。合板業が昭和40年くらいから設備が変わって来ました。スプレッターがかなり高速のものになったり、仕上げするスクレパーがサンダーに変わったりと。こういう時に色々試験をやっけて業界に普及し、設備を変えていった経緯はありました。北海道の合板工場がちょうど新しい設備に入れ替える時期に当たっていたんですね。当時の合板研究者がそういうようなことをやっていたのを覚えていますよ。

司会：木製窓枠の技術移転も民間でいいようですね。

窓の商品化とかログハウスなども



大久保勲氏(現場長)

大久保：30年代は製材乾燥、加工といった生産技術をやっけていて40年代くらいからは、徐々に研究の方向が変わって来まして。黒田先生の後半の頃、ちょうど研究テーマの転換時期だったように思います。製材工業に関することはもちろんやるが、最終ユーザーに対して窓とかいうように切り替わっているのが40年代後半なんですが、まだそこまでいっていません。

50年代に入ってから農業用構築物などの動きが出てきて、60年以降になると窓やログハウスの商品化など、40年代後半から50年代の成果が出てきたのが60年以降という感じします。

司会：住宅資材の研究の方はどうか。

大久保：内装材からシックハウスになるような原因物質が出てこない木質系建材の研究をしています。「林産プラザ」などに行って、ホルマリン測定はこうしてするんです。こういうものを使わなければ、健康的な家が出来ますよというような話ではできるように成果が出てきましたから。

司会：業界の人が足りなく試験場を活用されれば研究者もいろんな面でテーマを考えたり、業界がどんな問題になっているのかといった情報を取るにも重要だと思いますが。

信太：木製窓枠は林産試験場を活用した技術移転の典型ですが、日常よく試験場に行かれる企業は、結果として得することに繋がるのでないですか。

業界の注文は有り難い

大久保：その意味で旭川木青協(岩間八也会長)のメンバーの方

が試験場においでになって、私どもに注文をつけて頂くんですが、有り難いですね。「構造用製材と集成材スパン表」を作って下さいと、たまたま私どものところに来られて、それが道の行政全体を動かして完成したのなんなんですが、この種のものは自分達だけのものということだけでなしに、商売相手の建築屋さんの役に立つもので、事務局の上畑さんのお力もあるんでしょうが、メンバーの方々が試験場を利用する糧になって下さるのは有り難いと思っています。

司会：冒頭でも申しましたが、試験場が半世紀の歴史を刻まれたこと自体大変な出来事ですし、林材界の官界・業界多くの方が意義深いこのご慶事に心されながら、これからまた新たな期待の思いを寄せていることと拝察しますが、最後に何かお話し頂くことがありましたらお聞かせ下さい。

頭に残る木材糖化問題

黒田：現に生きている木材産業の技術指導あるいは関連する技術開発は付きまとうんだがね。これから起こるであろう産業に狙いを付けたものでの開発研究という点も、試験場が持っていなければならぬと考えます。

試験場は今問題にしてはいないことなんだが、私はいまだに指導所創設の一大テーマであった木材糖化の問題が頭に残っているんですよ。木材糖化会社が潰れるということであったので、試験場には直接には何も無いんでね。新しくスタートした会社は、あくまで中間試験の会社であると。もう2~3年時間が欲しかったと思うんですが、当時の知事からもああいう大きな事業は、地方の産業機関がやるべき問題でないというようなことで、いろいろ話の経緯があるんですが、頭に残ることなんです。

移転では一番苦労された千廣さん

信太：移転整備の問題は鈴木場長の頃に口火が切られたんですが、村上彦二さん(当時道木協会長)が科長以上を集めて業界がいかに試験場に期待しているかを言われたのを思い出します。千廣さんが場長で来られて、全面整備の認識が場員に薄かったことを驚かれたようで、もっと試験場の在り方を認識してもらわないとならないということ。それから開かれた試験場として、横にも視野を広げた研究もしていく必要があること。一番苦労されたと思えますね。

千廣さん時代に道の方で整備の基本計画が決定したんですが、後に林務部長になられて私的に知事にブッシュして下さったりして、4年後に庁舎ができて引っ越し。そして組織改正で一応終わったという流れでした。ですから10年以上かかっているでしょう。たまたま私が実際の行動時の場長に当たったもんですから地ならしして下さった多くの方々の賜ものですね。

私も近くで裸山一町10万円くらいと安いので、五町ほど購入しまして森林組合にアカエゾを造林して貰いました。一町当たり70万円かかりましたが、95%は国の補助、それでも下刈り、除伐、間伐をやったりで金がかかるので、無駄なく木は使わないといけなことを感じている所ですが、こんな金をかけた育林方法が続けられるのかなということ。もっと利用価値の高い木を植えて欲しいと、試験場卒業生としては思うんですが、実際に育ててみたら利用サイドだけで要求できない状況もあるわけです。カラマツは20cmくらいで一町当たりせいぜい100万円くらいと安い。やはり木質材料完全利用は、忘れないで欲しいなと思うんです。千廣さんが62年の記念誌に投稿されていて「業界・森林・基礎研究分野の三つから乖離しては駄目だ」といわれているんですが、いいことを教えてくれたんだなと思います。

歴代の場長やOBの皆さんに感謝

大久保：50周年にたまたま当たった縁を大事にしないとイケないと思っています。試験場がそれなりの評価を業界ははじめ関係方面から頂いているもの、現役だけのことでなく歴代場長さんとOBの皆さんの功績のお陰だと思えますし、それをずっと続けて行くのが我々の役目と考えます。21世紀になっても、それ以上に頑張っていかなければなりません。

昨年川上さんが場長の時、「試験研究の中長期ビジョン」を作ったんですが、その中の一つは、変化していく資源を活かすための試験研究をやらなければならない、二つは環境問題の上からも省資源リサイクルをやらなければならない、三つは健康安全福祉の面から木は一番人間に優しい材料、この面にも力を入れていかなくてはならない、四つはこれまで個別の技術開発をやってきたが、これをいろんな分野の研究成果を一緒に集めて、より高度な技術開発に結びつけられるのでないか。これを軸に研究を進めていきたいと思っています。

OBの皆さんに感謝すると共に木材業界の方々に試験場を与えて頂いたこともあり、有り難いことと思っています。業界に役立つ試験場であり続けるべく、職員一丸で努力したいと節目の決意を新たにしているところです。

北海道立林産試験場のあゆみ

- 昭和24年（1949） 北海道立林業指導所条例により開設を決定
25年（1950） 旭川市緑町に林業指導所開設，5部・16科制で試験研究指導業務を開始
26年（1951） 製材及び二次加工・繊維板試験プラントを設置
27年（1952） 機構改正により4部・1室・12課・3工場制に改組
28年（1953） 野幌支所（木材保存，食用菌研究室）を統合
北海道林産技術普及協会設立
30年（1955） 機構改正により4部・5課・3試験工場・3研究室制に改組
開設5周年記念行事を挙
32年（1957） 庁舎・研究室を新設
33年（1958） 機構改正により4部・1室・4課・4試験工場・7研究室制に改組
鋸目立技術教習所開設，乾燥試験プラント・ボイラー室及び特産，防腐，
繊維板の研究室を改築
35年（1960） 成型木炭及びパーティクルボード研究室を新設
開設10周年記念行事を挙
36年（1961） 耐火試験室を新設，会報実験室を設置し一般への利用開始
37年（1962） 恒温恒湿室を新設
39年（1964） 「北海道立林産試験場」に改称
40年（1965） 機構改正により5部・2課・19科制に改組，林産資料館を新設
開設15周年記念行事を挙
41年（1966） 北海道林産技術普及協会社団法人となる
42年（1967） 開発試験室を新設
43年（1968） 機構改正により5部・1室・2課・18科制に改組
44年（1969） 図書館を設置
45年（1970） 機構改正により5部・1室・2課・20科制に改組
開設20周年記念行事を挙
50年（1975） 開設25周年記念行事を挙
55年（1980） 開設30周年記念行事を挙
58年（1983） 林産試験場の移転整備に着手
61年（1986） 林産試験場の移転を完了
62年（1987） 林産試験場落成記念行事を挙
63年（1988） 機構改正により5部・4課・17科制に改組
平成元年（1989） 「木と暮らしの情報館」を開設
2年（1990） 開設40周年記念行事を挙
4年（1992） 機構改正により5部・4課・18科制に改組，デザイン科を新設
5年（1993） 機構改正により6部・4課・19科制に改組，きのこ部を新設
11年（1999） 機構改正により材料性能科・耐久性能科・製材科・乾燥科を廃止し，
防火性能科・耐朽性能科・再生利用科・製材乾燥科を新設
12年（2000） 開設50周年記念行事を挙